

子どもの運動・スポーツ遊びの機会提供に関する研究

1200469 田村 きの

高知工科大学経済・マネジメント学群

1. 背景

文部科学省が1964年から行っている「体力・運動能力調査」によると、子どもの体力・運動能力は、調査開始以降1975年頃にかけては、向上傾向が顕著であるが、1975年頃からは1985年頃までは停滞傾向にあり、1985年頃から2002年頃までの15年以上にわたり低下傾向が続いてきた（文部科学省、2002）。体力低下は1998年頃に歯止めが掛かり始め、以降の体力は総合的には向上しているが、1985年頃を最高値に回復したテスト項目は少ない（スポーツ庁、2018）。現在では、体力・運動能力が高い子どもと低い子どもの格差が広がるとともに、体力・運動能力が低い子どもが増加し、スポーツ少年団や部活動などで運動をよくする子どもとほとんどしない子どもとの二極化傾向がみられる。さらには、近年では、子どもが靴のひもを結べない、スキップができないなど、体を上手くコントロールできない、あるいはリズムをとって身体を動かすことができないといった、身体を操作する能力の低下も指摘されている。こうした傾向は、肥満や生活習慣病などの健康面、意欲や気力の低下といった精神面など、子どもが「生きる力」を身に付ける上で悪影響を及ぼすことが懸念されている。こうした現状を踏まえ、文部科学省の幼児期運動指針（2012）では、幼児にとっての運動は、体を動かす遊びを中心に行うことが大切であると示されている。子どもにとって多様な運動は、特に低年齢の子どもにおける遊びを通して経験する重要性が強調されている。

具体的には、2013年と2015年の笹川スポーツ財団「4歳～9歳のスポーツライフに関する調査」によると、運動・スポーツ実施頻度群の年次推移では、2013年より2015年にかけて非実施群（0回/年）は1.9増加し、高頻度群（週7回以上）は2.9%減少している（図1）。

実施頻度群	基準
非実施群	非実施(0回/年)
低頻度群	年1回以上週3回未満
中頻度群	週3回以上週7回未満
高頻度群	週7回以上(364回以上/年)

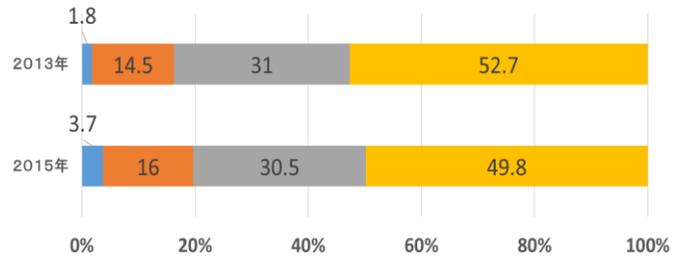


図1 運動・スポーツ実施頻度群の年次推移
（笹川スポーツ財団、2013、2015）

また、運動・スポーツの好き嫌いの年次推移では、2013年、2015年ともに、好き、どちらかという好きが9割を超えている（図2）。



図2 運動・スポーツの好き嫌いの年次推移
（笹川スポーツ財団、2013、2015）

つまり、運動・スポーツを9割以上の子どもが好きと答えているにもかかわらず、運動・スポーツの実施率は減少していることが分かる。

次に、自宅周辺の運動・スポーツ・運動遊び環境に対する保護者の意識調査では、半数の保護者が安全だとは思はないと回答した（図3）。

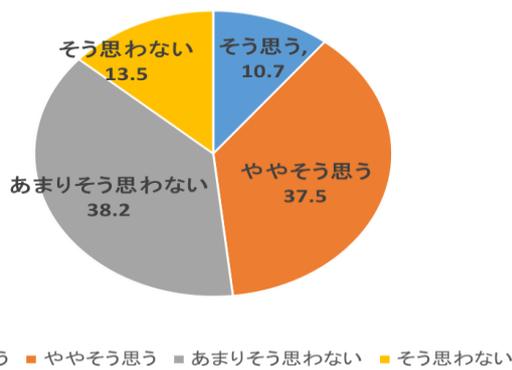


図3 自宅周辺の運動・スポーツ運動遊び環境に対する保護者の意識調査
(笹川スポーツ財団、2013、2015)

保護者が自宅周辺の環境を安全だと思っていないため、子どもを外で遊ばせることを躊躇してしまい、子どもが運動・スポーツ遊びができないことも考えられる。また、こうした背景には、子どもを取り巻く環境の問題として、子どもにとって遊ぶ「仲間」「時間」「空間」の減少、室内で遊ぶおもちゃ、ゲーム、スマートフォンの普及、公園の減少、かつ遊び方の制限などが関係しているのではないかと考えられる。今後も、安全性を確保しつつ、子どもが運動・スポーツ・遊びに触れられる機会を提供できる対策が必要である。

2. 高知県における子どもの体力、運動・スポーツ環境の実態

高知県における子どもの体力は、全体的に上昇傾向にあり、2018年度時点で中学校では体力合計点が男女とも過去最高の結果となった。しかし、小学5年男子30位、小学5年女子33位と全国では低い結果となっている(図4)。

学校の体育・保健体育の授業以外での運動(体を動かす遊びを含む)・スポーツの総運動時間(分)を全国と比較すると、男子は33.1分下回っており、女子は3.9分上回っていることが分かった(図5)。現状の1週間の総運動時間が60分未満の生徒の割合は小学5年男子が7.3%(2017年度)、小学5年女子が12.7%(2017年度)である。

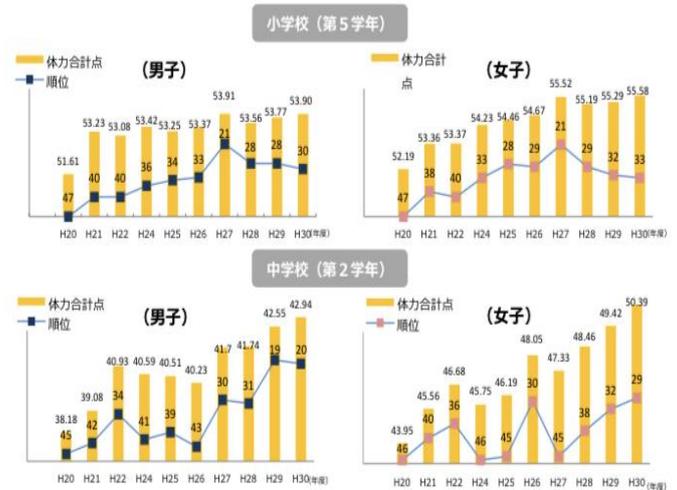


図4 高知県の小中学生の体力合計点の推移と全国順位
(第2期高知県スポーツ推進計画 Ver2、2019)

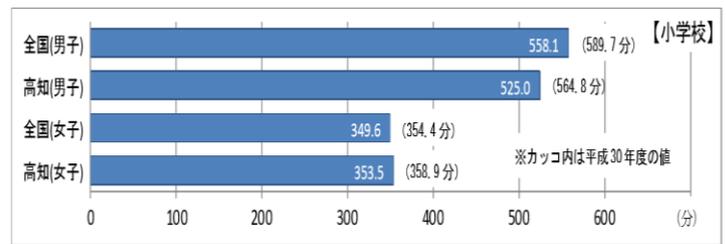


図5 1週間での学校の体育・保健体育の授業以外での運動(体を動かす遊びを含む)・スポーツの総運動時間(分)
(全国体力・運動能力・運動習慣等調査、2019)

高知県スポーツ推進計画では、「スポーツ参加の拡大」を踏まえて、ライフステージに応じたスポーツ活動の推進という施策が検討されている。総合型地域スポーツクラブ等を核とした地域スポーツ推進体制を整え、年代ごとのスポーツ活動の推進や地域の実情に応じたスポーツ活動の充実とその環境整備を行われようとしている。しかし、課題として、性別や年代などによる様々な課題や、地域住民の多様なニーズに応じたスポーツ環境が十分に整っていないことが挙げられている。そこで、学校以外で子どものスポーツ環境を整える必要性があり、担い手としては総合型スポーツクラブや民間企業などに期待が寄せられている。

3. 目的

本研究では高知県における、子どもたちの遊びの機会提供

を担う組織の現状と課題を明らかにするとともに、子どもに対する持続可能な遊びの機会提供の可能性を提示することを目的とする。

4. 研究方法

本研究では、はじめに、高知県で実際に子どもに遊びのイベントなどを提供している NPO 法人まほろばクラブ南国(以下、まほろばクラブ南国)、NPO 法人エックススポーツ(以下、エックススポーツ)を対象として、活動内容と活動する上での課題に関するヒアリング調査を実施した。調査実施日はそれぞれ 2019 年 7 月 29 日(エックススポーツ)、2019 年 11 月 6 日(まほろばクラブ南国)であった。次に、ヒアリング調査から得た現状、課題を整理し、子どもに対する持続可能な遊びの機会提供の可能性を検討することとした。

5 結果

5.1 NPO 法人 まほろばクラブ南国(総合型スポーツクラブ)

5.1.1 活動内容

まほろばクラブ南国は、「多種目型」「多世代型」「自主運営型」の特徴を持つ、総合型地域スポーツクラブである。子どものスポーツ環境については「まほろばキッズアカデミー」という活動があり、日替わりでスポーツ、文化の学習時間スペースを開設し、子どもの健全育成の向上、スポーツ・文化のタレント発掘や、子どもの放課後活動のサポートなどを行っている(図6)。

まほろばキッズアカデミー

	料金
月曜日: 球技で体力UP	週1コース 1700円/月
火曜日: 英会話	週2コース 3200円/月
水曜日: タグラグビーor将棋(選択制)	週3コース 4700円/月
木曜日: 走る・飛ぶ・投げるを取り入れた体力UP	週4コース 6200円/月
金曜日: 卓球or三味線教室(選択制)	週5コース 8200円/月
土曜日: 大篠陸上サークル(希望者のみ)	

図6 まほろばキッズアカデミープログラム

5.1.2 現状と課題

まほろばキッズアカデミーに多くの小学生が参加しており、その理由としては、学校は授業終了後、スポーツクラブチームや学童の子どもがグラウンドや体育館を使っているため、

ただ遊びたい子どもは使うことが出来ないこと、学校の統合などにより全校生徒が何百人といる小学校では休み時間にグラウンドを使える人数が限られてしまい、ドッジボールなどで思いっきりボールを投げたりする機会が減少していること、スポーツクラブは勝利にこだわってしまいがちで色んなことが体験できていないことなどが挙げられる。

まほろばキッズアカデミーのような様々な体験が出来る機会があれば参加したいという子どもの需要はあるものの、それを教えられる指導者が確保できない、南国市立スポーツセンターのみでしか開催しておらず、開催できる場所が限られており遠方の子どもは気軽に参加できないなどの課題が挙げられる。

5.2 NPO 法人エックススポーツ(スポーツ推進企業)

5.2.1 活動内容

エックススポーツは、高知大学の卒業生が立ち上げ「さあ高知をスポーツで大家族に！」をテーマに様々な活動を展開している。その中で子ども達のスポーツ離れや指導者不足、体験機会の不足などの課題を地域とともに解決を図る活動、「X-Kids サポーターズ」がある。この活動は、「地域を担う子供たちを主役に。」を理念に子どもたちの体験を企業が応援するものである(図7)。エックススポーツが提携する既存の地域少年スポーツクラブである、FC一宮、潮江 Jr. FC らの少年サッカーチーム約 40~50 名を対象に、様々なスポーツを指導できる大学生と月 3 回程度、バドミントン、陸上、ダンス、ラグビー、野球の指導を行っている。活動の目的は、ジュニア世代に一つのスポーツに縛られず、様々なスポーツ体験を通して子ども達に選択肢を増やすこと、学生のキャリアアップとして、多くの指導者に触れられる機会の提供、既存のリソース(場所・もの)を活用することである。

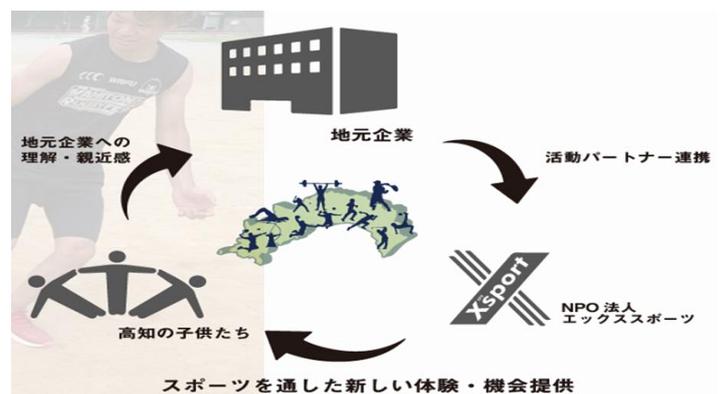


図7 エックススポーツと地域と企業との連携
(エックススポーツホームページより抜粋)

5.2.2 課題と現状

エックススポーツは元々ある場所に自ら赴いてスポーツ指導を行うスタイルをとっているが、これは、拠点となる場所を確保することが出来ていないからである。市や県が運営する施設の管理者になることが出来れば収益を見込めるが、現時点で NPO 法人を創設したばかりということもあり、実績も少なく、スポンサー企業も限られており、事業としてもまだまだ厳しい現状にある。

X-Kids サポーターズを続けていく上での課題には、開催するイベントの収益や、スポンサー収益から捻出する活動費では限界があること、教室・イベントを開催するための場所の確保が困難であること、メインスポーツだけをしている方が強くなるという受入先の指導者側の従来の考え方からの転換が挙げられる。

5.3 結果のまとめ

以上の結果より、子どもたちの遊びの機会提供を担う組織の共通の課題としては、場所の確保、資金の確保、指導者の確保が挙げられることが分かった。中でも、場所の確保が最も困難な課題であり、まほろばクラブ南国、エックススポーツ両者ともに、子どもが最も集まる場所である小学校との連携が、今後必要になってくると考えていることが分かった。

そこで、民間団体と小学校との連携可能性に着目する。学校体育施設を開放するにあたって、防犯上の課題、問題が起きた場合の責任のありかに対する課題、教育の場所での営利なイベントを行うことへの課題などが考えられる。しかし、笹川スポーツ財団の政策提言(2017)には、「地方自治体は、授業時間帯以外の放課後から休日の学校体育施設の開放を、教育委員会ではなく、地域のスポーツクラブなど公益性の高い民間組織に委ねることで、施設利用の最適化に務めるべきである。つまり、社会体育施設が指定管理者制度を導入したように、学校体育施設も放課後と休日に限って学校運営協議会などが指定する団体に管理を任せ、効率的に運営する。学校教育としての体育は学校が責任をもって運営し、放課後と休日は地域住民への開放を促進することにより、学校が地域の公共財であることの再認識につながり、社会全体でスポーツをささえる基盤にもなる。」と、授業時間帯以外の放課後や休日の学校体育施設の開放ができる時間帯において、民間

企業との連携を進めていく必要性が示されている。そこで、具体的な連携可能性を探るため、小学校側へヒアリング調査を追加実施することとした。

6. 二次調査

6.1 二次調査の概要

高知県の小学校におけるスポーツ環境の現状、民間企業との連携可能性を知るために、高知市立小高坂小学校を対象にヒアリング調査を実施した。調査実施日は、2019年12月23日であった。

6.2 結果

小高坂小学校では、スポーツは学びの場と考えられている。特に、達成感、助け合い、コミュニケーションに関しては、座学での授業よりも子どもは感じやすい。教師側も、目に見える結果が多く表れ、「何回多くできたね」や、「形がきれい」など子どもを直接褒める機会が多くなる。このことから、人間力を培うためにも運動・スポーツ遊びは重要だと考えられている。しかし、学校の授業は15時40分に終了し、下校は16時30分と定められており、この限られた時間の中に、帰りの会なども含まれているため、運動・スポーツ遊びの機会を平日に確保することは不可能であることも明らかになった。さらには、下校後は他団体の予約で施設が利用されているのが現状である。

一方で、休日の学校施設の利用は学校の管理下であれば利用が可能なが分かった。例え、休日に他団体の予約が入っていても、学校の管理下のため、学校行事とすれば優先的に利用することもできる。さらに、学校の管理下のため万が一ケガや事故が起きても、保証される。NPO法人による体験イベントなどを運営する上での必要経費を会費として回収して行うことも可能であることが分かった。

7. 考察と提案

ヒアリング調査の結果から、まほろばクラブ南国、エックススポーツなどの民間側は、子どもの運動・スポーツや、体験イベントを行うための場所を必要としており、小高坂小学校などの学校側は、子どもの運動・スポーツや、体験イベントなどの機会を必要としていることが分かった。実際に休日

を利用して、民間と小学校が連携できれば、お互いに Win-Win の関係になることが考えられる。

そこで、休日の他団体の予約が比較的少ない午前中をメインに NPO 法人を主体に学校の施設を利用した体験イベントの開催を提案する。対象はその小学校に通っている地域の小学生を対象とし、広告方法は学校でのチラシの配布、掲示板への掲載とする。

指導者に関する課題に対しては、中学・高校生時代にスポーツ、部活動経験のある学生や、4 年生になり部活動を引退した学生を対象にし、募集や育成を行うことが効果的である。学生への報酬は、高知県文化生活スポーツ部の予算（図 8）から検出することはできないだろうか。2018 年度の予算では、スポーツ参加の拡大やスポーツを通じた活力ある県づくりに約 6 億 6 千万円、技術力向上には約 5 億円充てられている。これらを人件費として少しでも充てられるようにしていくことを提案する。

7. 強力な推進体制によるスポーツ振興施策の実行	1,090,833	1,153,107
(1) スポーツ参加の拡大	609,924	394,892
06生涯スポーツ推進事業費	276,794	61,292
15スポーツ施設管理運営整備事業費	333,130	333,600
(2) 競技力の向上	227,949	484,771
07競技力向上総合対策事業費	216,829	465,651
15スポーツ施設管理運営整備事業費	11,120	19,120
(3) スポーツを通じた活力ある県づくり	252,960	273,444
03スポーツリズム振興事業費	182,510	194,348
06生涯スポーツ推進事業費	64,247	72,864
15スポーツ施設管理運営整備事業費	6,203	6,232
部 合 計	15,006,321	13,228,195

図 8 文化生活スポーツ部の予算(単位:千円)

(平成 30 年度 文化生活スポーツ部施策体系表)

さらに、他県で民間と学校が連携した事例を検討したところ、学校において平日の放課後や授業中にも連携できる可能性もあることが分かった。以下に、名古屋市の公立小学校 3 校の部活動の運営を受託したリーフラス株式会社と、文化振興課や教育委員会と協働して、小学校の図工の時間に鑑賞授業を提供している NPO 法人芸術資源開発機構 (ARDA) の例を説明する。

リーフラス 株式会社

名古屋市の公立小学校で長く行われてきた部活動が教員の働き方の見直しや課題解決のため、2021 年 3 月末で廃止が決定された。そのためのモデル事業として、名古屋市公立小学校である稲葉地小(中村区)、白鳥小(熱田区)、苗代小(守山区)の 3 校の部活動の運営をリーフラスが受託している。スポーツ指導者派遣費用を無償とする代わりに、地域の子どもたちを対象にしたスポーツスクールを放課後の学校施設にて開講し、「学校」「地域」「企業」の三方利益を得る形式を採っている。

NPO 法人芸術資源開発機構 (ARDA)

ARDA は学校現場で負担の大きな先生に代わって、美術館との調整を行っている。さらに、文化振興課や教育委員会と協働し、市民ボランティアを募った上で、鑑賞コミュニケーターとして育成し、大和市、西東京市の小学校の図工時間にはいり、対話を通じた鑑賞授業を行っている (図 9)。



図 9 ARDA 連携図

(ARDA ホームページより抜粋)

このような事例が成り立った要因は、学校側の積極的な連携体制と、民間企業がサービスの無償提供を行っていることにある。民間企業側は無償での提供にはなるが、地域貢献という面を考えると協賛企業を得るための広告になる利点が考えられる。

また、子どもにとっての利点は、小学校で行ってくれることで参加がしやすく、運動遊びが身近になり、自然と運動・スポーツに触れる機会が増えることや、様々な体験を気軽に行えることでスポーツへの選択肢が増えることが考えられる。

他県の事例より、平日の放課後であればリーフラス、授業内では ARDA のように連携できる可能性があり、工夫次第で子

どものスポーツ機会をまだまだつくりることができる可能性を感じた。

8. 今後の課題

本研究では、「子どもの運動・スポーツ遊びの機会提供に関する研究」を研究課題として、実際に子どもにあそびのイベントを提供している民間団体に調査を行い、小学校と連携を深めていく必要があるという結果が得られた。今後の課題としては、小学校とNPO法人が連携するにあたり、前例や実績が少ないことや、文化生活スポーツ部の予算の一部を大学生の人件費に充てるために、行政の理解が必要になることである。本研究の題材となった学校と民間団体の連携は、これから担う子どもにいろんな体験をしてもらうことで、高知県のスポーツ水準を上げる投資になるため、積極的に進めていくべきである。

9. 謝辞

最後に本研究を進めるにあたり、ヒアリング調査に応じていただきましたNPO法人まほろばクラブ南国様、NPO法人エックススポーツ様、小高坂小学校の方々に心より感謝し厚く御礼申し上げます。有難うございました。

参考文献

- [1] 高知県スポーツ振興計画
http://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310501/files/2013120600386/2013120600386_www_pref_kochi_lg_jp_uploaded_attachment_106564.pdf
- [2] 笹川スポーツ財団「4歳～9歳のスポーツライフに関する調査」2015
<http://www.ssf.or.jp/research/proposal/tabid/307/Default.aspx>
- [3] 高知県庁ホームページ
令和元年度全国体力・運動能力・運動習慣等調査 結果概要
www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/310501/tairyokutesuto.html
- [4] リーフラス株式会社
https://leifras.co.jp/wp_leifras/news/p5675/

[5] NPO法人 芸術資源開発機構 (ARDA)

http://www.arda.jp/dialogue/elementary_school_new

[6] スポーツ庁「平成30年度 体力・運動能力調査結果の概要及び報告書 結果の分析」

https://www.mext.go.jp/prev_sports/comp/b_menu/other/_icsFiles/afieldfile/2019/10/15/1421921_2.pdf

付録

第一次調査 ヒアリング項目

- ・活動内容
- ・イベントに参加する子どものニーズ
- ・活動をする上での課題
- ・これからの展望

第二次調査 ヒアリング項目

- ・小学校の現状
- ・放課後などの取り組み
- ・民間と連携することは可能なのか